

文学：：いや、アニメか？ 泉鏡花『三角尺』

p-home

三尺角（泉鏡花）を読んだ。

昭和初期の小説で、すこし身構えてしまう古

風な文体だ。

基本ノンフィクションしか読まない私がこれ

を選んだのは、『第1回夏のわくわく読書感

想文コンクール』の課題図書であり、普段触

れない文と向き合ういい機会と考えたからで

ある。

比較的短めなお話だが、文体も内容も難解で

どう読み取るか悩んだ。

テーマは日常に潜む怪奇といったところだろ

うか？ 作品のメッセージは？ 等考えよう

は様々あるが、

私が注目したのは物語とメッセージ性ではな

く、この文体から感じ取れる「アニメ的」要

素だった。

『三角尺』からは情景が細かく、アニメーシ

ョンするのように、ありありと伝わってくるの

である。  
例として一部を引用する。

▽フト目を留めて、俯向いて、じっと見て、  
又梢を仰いで、

▽「与吉さんのいうようじゃあ、まあ、嘸さ  
ぞこの葉も痛むこツたろうねえ。」

▽と微笑んで見せて、少いのがその清い目  
に留めると、くるりと廻って、空さまに手を  
上げた、お品はすつと立って、しなやかに柳

の幹を叩たたいたので、蜘蛛の巣の乱れた薄  
い色の浴衣の袂は、ひらひらと動いた。

○○して、○○して、：と一文が長く読点で、  
刻むように、時が僅かに進む。

これを読んでみるとアニメをゆつくり再生し  
ているような感覚に包まれる。

そこに気づいたトタンに、この泉鏡花世界の  
楽しみ方が分かった気がして快感だった。

ある画風で絵が動くアニメがあれば、ある文

体で動く文学もあるらしい。絵画または映像のように、見て、感じる、そういう文学もアリなのかと。

アニメと文学といえ、文学を振興するプロジェクトが

「文学を知らなければ、目に見えるものしか見えないじゃないか。文学を知らなければ、どうやって人生を想像するのだ（アニメか？）というコピーを打って炎上した件を思い出す

が、目に見えるもので：：映像的に文学を読む、アニメ的文学という体験は思った以上に楽しさがあり、莞爾（にっこり）してしまっ

た。  
「文学」と呼ばれるアニメがあるのなら「アニメ」と呼ばれる文学があってもいい。